

2012 年度決算説明会

主な Q&A

Q: 一部の地方銀行では、配当性向目標や自社株買いを含めた総還元率目標を採用しているが、MUFG でも同様の目標を導入する考えはあるか。

A: 従来から配当性向は 3 割を一つの目線としてきた。過去の配当性向の推移を見ても、若干の上下はあるものの概ね 20~30%で推移している。ただ、配当性向目線により自動的に配当を決める考え方はとらない。今回の増配についても、市場の変動、今後の環境変化等を織り込みつつ、グループの実力ベースの収益力が切り上がったと判断した結果であり、最後は総合判断だと考える。

Q: MUFG の中長期的に目指す姿として、「世界に選ばれる、信頼のグローバル金融グループ」を掲げているが、中期経営計画 1 年目のグローバル化の成果と課題を教えてください。

A: 足元1年間の成果というわけでは無いが、ベースには当社がこれまでの積み重ねてきたものがある。ユニオンバンクについても、一旦コミットすると決め、それを継続してきた成果で今がある。アジアでも、戦後に東京銀行が国交回復間もない国へ進出した成果がベースとなっている。このベースに何を上乗せするかが課題である。米国では、ユニオンバンクのノンオーガニック戦略や、東西に分散している体制を統合することによる効率化推進。アジアでは、非日系ビジネス、クロスボーダー取引やプロジェクトファイナンスのように付加価値の高いビジネス。また、アジアの内需も取り込んでいきたいと考えており、ヴェイティンバンクとの資本・業務提携は、この方針に沿ったもの。アジアの他国でも、同様の投資をやっていきたいと考えている。

課題として認識しているのは、リスク管理、内部管理、コンプライアンス体制等グローバルガバナンス体制の構築。この観点から、リスク委員会とグローバルアドバイザリーボードの新設を決定した。

Q: 普通株式等 Tier1 比率の水準を考える上での、包括利益に対する考え方を教えて欲しい。

A: 同じ G-SIFIs と言っても、金融機関ごとに事業のポートフォリオが違い、リスクアセットの伸縮性が違う。MUFG はリスクアセットの伸縮性が相対的に低い事業体であるとの考えをベースに、普通株式等 Tier1 比率のあり方等を考えていく。

Q: 海外貸出利鞘の見通しについて教えて欲しい。

A: リーマン・ショック後の貸し手市場ではなくなってきた。欧米銀行もリーマン・ショック以前程活発ではないが、市場に戻ってきている。債券市場が活況でもあり、利鞘は全般的に、特にアジアや非投資適格級の企業向け貸出の分野で、低下する傾向にあると見ている。ただし、非投資適格級の企業向け貸出は多くはないので、影響は少ない。

Q: アベノミクスへの対応について教えて欲しい。

A: 成長戦略分野である医療、環境エネルギー、次世代インフラ等については、各部署の中にチームを立ち上げ対応していく。教育資金の贈与非課税化や日本版 ISA 等は、MUFG の銀信証のビジネスモデルがぴったりとフィットする分野であり、かなりのスピード感を持って対応している。また、日系企業の海外事業拡大・海外進出等も一層拍車が掛ると見ている。

以上